

〈研究ノート〉

学校図書館職員のスキル向上を 目指した研修機会のあり方

—SLiiCの活動を事例とした一考察—

野口 武 悟*¹・大 作 光 子*²

本稿は、学校図書館職員（司書教諭、学校司書）の専門性やスキルの向上を目指した研修機会のあり方について、筆者らが参画しているSLiiC（スリック）の活動を事例として考察しようとするものである。

1. 学校図書館とその職員

(1) 学校図書館とその職員の現状

学校図書館は、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に設置される図書館のことであり、「学校教育法施行規則」第1条及び「学校図書館法」第3条によって前述の学校に設置が義務づけられている。その目的は、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成すること」（「学校図書館法」第2条）である。現状では、蔵書冊数について国の定めた整備目標値である「学校図書館図書標準」を達成している学校が小学校で56.8%、中学校で47.5%に留まる¹⁾など、学校図書館の環境は決して充実しているとは言い難い。しかし、2008年（小学校、中学校）と2009年（高等学校、特別支援学校）に告示された「学習

* 1 専修大学文学部准教授

* 2 専修大学文学部兼任講師

指導要領」においては新たに「言語活動」の充実が盛り込まれるなど、学校図書館の機能の充実や積極的な活用を求める機運は高まっている。

この学校図書館を中心になって運営する職員が司書教諭や学校司書である。司書教諭は、「学校図書館の専門的職務を掌らせるため」（「学校図書館法」第5条）に12学級以上の規模がある学校（特別支援学校においては学部）に配置が義務づけられている教育職員である。ただし、配置が義務づけられている学校の規模は12学級以上とされているため、司書教諭の配置率は小学校で64.6%、中学校で61.2%、高等学校で83.2%となっている（2012年度²⁾。配置されている司書教諭のほとんどは、教諭、指導教諭、主幹教諭のいずれかが兼務で当たっている。これは、教職員定数のなかに司書教諭の専任定数が設定されていないためであり、「保健室」に専任配置されている養護教諭とは対照的である。

一方、学校司書は、専任配置が難しい司書教諭の職務を補うために、事務職員身分（一部には、実習助手などの教育職員を充てるケースもある）で配置される職員の総称である。現状では、学校司書は明確に法制化されていない³⁾が、文部科学省では、2012年度から約150億円（小学校約9,800人分、中学校約4,500人分）を地方交付税措置し、配置促進を図っている。2012年度の学校司書の配置率は、小学校で47.8%、中学校で48.2%、高等学校で67.7%となっている⁴⁾。

現時点では、司書教諭と学校司書がともに配置されている学校が学校図書館の運営において最も望ましい状況と考えられている。こうした学校は、小学校で34.6%、中学校で34.1%、高等学校で60.6%となっている。また、司書教諭もしくは学校司書のいずれか一方のみが配置されている学校は、小学校で43.5%、中学校で41.7%、高等学校で30.3%である。小学校の21.9%、中学校の24.2%、高等学校の9.1%には、司書教諭、学校司書のいずれも配置されていない（2012年度⁵⁾。

(2) 学校図書館職員の資格と研修

司書教諭の資格は、「学校図書館法」第5条の規定に基づき、文部科学省令（「学校図書館司書教諭講習規程」）に定める5科目10単位⁶⁾を大学等で履修することによって取得することができる。しかし、わずか10単位で資格が取得可能なため、専門性やスキルを形成・向上するためには、その職についてからの研修が不可欠である。

一方、学校司書は、法制化された職ではないため、採用・配置している自治体によって学校司書に求める資格要件にばらつきがある。すなわち、資格要件を司書教諭の資格を有する者とするところ、図書館司書の資格を有する者とするところ、司書教諭と図書館司書の両方を有する者とするところ、資格は不問とするところなどである。したがって、学校司書の専門性やスキル自体にもばらつきが存在する可能性が高い。とりわけ、資格を不問とする自治体では、採用後の研修が重要となる。

では、学校図書館職員の専門性やスキルの向上を図るための研修としては、どのような機会があるのだろうか。

一つには、校内研修が考えられるだろう。しかし、司書教諭も学校司書も、校内に配置されるのは1人であることが多く、専門性やスキルの向上を図る研修を校内で行うことは事実上不可能に近い。

二つめには、自治体の教育委員会が行う研修がある。これについては、司書教諭、学校司書を配置する自治体すべてが行っていると思われるかもしれないが、そうではない。例えば、東京都内の学校司書配置自治体を対象とした調査⁷⁾によると、回答のあった39市区町村のうち研修の機会を設定しているところは25市区町村（64.1%）であった。研修の回数は、年に1回から12回までと自治体によって幅があり、研修機会の差が大きい。また、同じ調査によると、研修を行っている25市区町村のうち19市区町村では、司書会など学校司書同士のつながりや情報共有を図る機会を設けていた。逆にいうと、学校司書を配置していても、研修の機会も司書会も設

定されていない、いわば“情報不足”と“孤立”した状況下で勤務せざるを得ない自治体が14市区町村（35.9%）も存在しているのである。

研修が行われていない、あるいは不十分な自治体の学校に勤務する学校図書館職員は、外部の学校図書館関係団体などが主催する研修に自主的に参加することになる。いわば、自己研修である。これが三つめの研修の機会であり、現状では最も効果的な研修の機会となっている。公益社団法人全国学校図書館協議会（全国SLA）などが研修の機会を提供している。しかし、既存の自己研修の機会は、講演会やセミナー、研究集会など、特定の場に集う方式が一般的であり、開催される場所が遠方の場合、時間的な余裕や参加費・交通費などの金銭的な問題⁸⁾から参加したくても参加できないという指摘をしばしば耳にする。つまり、“場所”，“時間”，“費用”という課題が見えてくる。学校図書館職員の専門性やスキル向上を図るためには、これらの諸課題を軽減ないし解消する研修機会の構築が必要である。

こうした研修機会における諸課題（情報不足、孤立、場所、時間、費用）に注目し、その軽減ないし解消を図り、学校図書館職員の自己研修の機会の充実に資するために活動を開始したのがSLiiiC（スリック）というプロジェクトである。

2. SLiiiC とその活動

(1) SLiiiC の概要

SLiiiC は、School Libraries Communication Collaboration and Combination の略称である（図1）。2005年8月に、学校図書館職員の自己研修の機会の充実を目的のひとつとして、図書館情報学を専攻する大学院生らを中心に開始された非営利のプロジェクトである。ただし、大学院生だけで

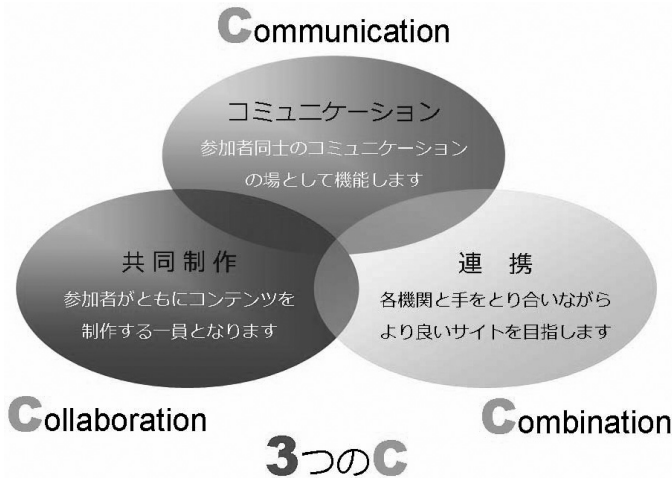


図1 SLiiiC のコンセプト

はできることは限られており、現場の学校図書館職員、研究者などの意見が必要との考えから、SLiiiC のコンセプトに賛同する学校図書館職員、研究者などにも参画してもらい、活動を本格化させていった⁹⁾。

現在は、10人程度のメンバーで運営しており、メンバーは、大学院生よりも学校図書館職員や研究者が主体となっている。SLiiiC は非営利のプロジェクトであるが、法人格は持っておらず、特定のスポンサー企業・団体があるわけでもないため、公的あるいは民間の助成金などに応募しながら、事実上、手弁当で活動しているのが実態である。主な活動としては、①ウェブサイトによる情報提供、②サマー・ワーク・キャンプや講習会などの開催、③サマー・ワーク・キャンプや講習会などの短文投稿ブログや動画での配信とアーカイブ化を行っている。これらの活動を通して、前述の諸課題の軽減ないし解消に取り組んでいる。

以下、これらの活動について順に見ていくことにする。

(2) ウェブサイトによる情報提供

SLiicとしてまず取り組んだのは，“情報不足”，“孤立”，“場所”，“時間”，“費用”という既存の研修が抱える課題のいずれにも対応するべく，ウェブサイト¹⁰⁾による情報提供を通して，いつでもどこでもタダで必要な情報を得られ，共有でき，専門性やスキルの向上を図れるようにすることであった（図2）。ウェブサイトには，国立情報学研究所が開発・提供しているNetCommons¹¹⁾というシステムを利用している。

ウェブサイトの構築にあたって，はじめに，何をコア・コンテンツとするかを定める必要があった。そこで，現職の学校図書館職員20人程度にアンケート調査やフォーカスグループインタビューを行い，必要としている情報，高めたい専門性やスキルを抽出し，「日常的に必要な技術の習得支援」「活動事例の紹介」「学校図書館運営マニュアル」の3つに類型化した。この3つをコア・コンテンツとして設定し，コアごとにコンテンツを制作・公開することとなった。現在までに，「日常的に必要な技術の習得支援」と「活動事例の紹介」については，複数のコンテンツが制作・公開されている。

「日常的に必要な技術の習得支援」については，現在，「図書の補修」「ブックコートのかけ方」「サイン表示ライブラリ（画像と材料・作り方）」「図書館オリエンテーションの方法」「読み聞かせ・紹介本の実例集」などのコンテンツを制作・提供している。また，「活動事例の紹介」については，「こどもレファレンス事例集」「学校図書館活用の学習指導案」などのコンテンツを制作・提供している。例えば，「図書の補修」では，「無線綴じの本の補修」「破れたページの補修」「はずれたページの補修」「糸綴じ本の補修」について，それぞれの作業手順・内容をテキストと動画で紹介している。現場では，図書の補修を必要とする場面は多いものの，補修のスキルを学ぶことのできる研修は自治体でも外部の関係団体でもほとんど用意されていない。また，「こどもレファレンス事例集」では，「バナナ虫」が



図2 SLiiCのウェブサイト(トップページ)

調べたいけれど、図鑑に載ってません！」「宮沢賢治の『やまなし』のやまなしをみたい」「玉川上水の水位の高低がわかる縦断図がほしい」など、児童生徒や教職員から学校図書館に実際に寄せられた質問・相談とそれへの回答・援助の事例が集められている。探究型の授業（「調べ学習」など）が増えているなかで、学校図書館においてもレファレンスサービスへのニーズが高まっている。

コンテンツの制作は、SLiiCに参画する大学院生、学校図書館職員、研究者らが共同して行っている（図3）。例えば、「図書館の補修」の動画コンテンツの制作工程は、図4のようになる。Step1のポイントの確認は作業メンバー全員で、Step2のシナリオ作りとStep3のリハーサルと本番の出演は現場の学校図書館職員中心で、Step3の撮影とStep4の編集・ウェブサイトへの公開は大学院生中心で行っている（図5）。

なお、「学校図書館運営マニュアル」については、各地の自治体等における学校図書館運営マニュアルの作成状況調査と内容分析を行っている段

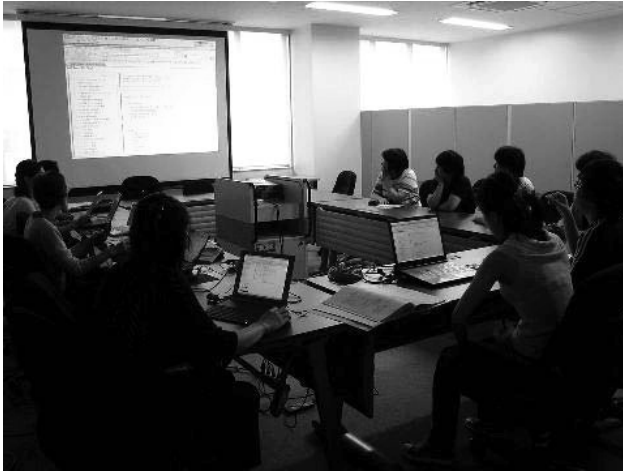


図3 参画メンバーによるコンテンツ検討会議



図4 動画コンテンツ「図書の補修」の制作工程

階¹²⁾であり、今後、コンテンツの制作に取りかかる予定となっている。

ウェブサイトの構築にあたって、コア・コンテンツの制作とともに重視したのは、コミュニティ機能の提供である。自治体内に司書会などがなく、横のつながりを作ることが難しい“孤立”した状態の学校図書館職員が相互に情報交換や共有できる場をつくろうと掲示板やグループスペース、メ



図5 動画コンテンツ「図書の補修」の制作ポイントの確認

ーリングリスト (ML) を提供した。しかし、当初は、NetCommons の操作性などの課題もあって、十分に機能することが難しかった。その後、SNS (Social Networking Service) が普及したこともあって、現在では掲示板については閉鎖し、代わりに短文投稿ブログの Twitter (ツイッター) や会員制 SNS の Facebook (フェイスブック) にこの機能を移行している。

こうしたウェブサイトによる情報提供の有効性を確認するために、定期的にユーザを対象とした調査を行っている。例えば、2010年5月に SLiiC のウェブサイトを訪れたユーザを対象に行った調査では、回答のあった25人 (学校図書館職員、公立図書館司書など) が挙げた有益なコンテンツは「図書の補修」(12人)「サイン表示ライブラリ (画像と材料・作り方)」(10人)「図書館オリエンテーション」(9件) などであった。一方で、改善してほしい点としては「データが重い」「リンク集の更新」「拡大画像サイズの統一」などが挙げられた。調査結果から把握できるユーザのニーズにきめ細かく対応していくことで、ウェブサイトの信頼性をより高めていくことが可能であると考えている。

(3) サマー・ワーク・キャンプや講習会などの開催

SLiicとしては、ウェブサイトによる情報提供と同時に、対面可能な場での学校図書館職員のコミュニティ作りにも取り組んでいる。「サマー・ワーク・キャンプ」や各種講習会の開催である。これは、既存の研修機会が抱える“情報不足”，“孤立”，“費用”という課題に対応するべく，現場ですぐに活かせる情報を，参加者同士で学び合うことや交流することを重視したワークショップや実習をメインとした形で提供しようとするものである。そのため，参加募集人数を25名前後に設定している。費用については，400～500円程度の資料代などの実費を徴収することはあるものの，助成金をもとに無料での開催を心がけている。しかし，「サマー・ワーク・キャンプ」や各種講習会では，“場所”，“時間”という課題は残ってしまう。これらの点については，後述するように，インターネットを經由してTwitterを用いた実況中継やUstream（ユーストリーム）を用いた動画配信を行っている。

「サマー・ワーク・キャンプ」は，2006年8月に開催以来，ほぼ毎年8月に開催している¹³⁾。主なワークショップや実習のテーマは，次の通りである。「NPOとは？組織にあった運営方法を選択するために」（2008年），「図書館と科学の本の読み聞かせ講座」「はじめてのアニメーション：読む力を引き出すメソッド」(図6)(2009年)，「本の世界の美味しい食べ物」(2011年)，「つながる学校図書館」「はじまる学校図書館」(2013年)である。これらのうち，ワークショップ「はじめてのアニメーション：読む力を引き出すメソッド」では，近年注目を集めている読書のアニメーションの手法について，NPO法人日本アニメーション協会の黒木秀子理事長を講師として，実際にアニメーションを体験しながら学んだ。

「サマー・ワーク・キャンプ」以外にも，適宜，各種の講習会を開催している。主なものを挙げると，「特別支援教育と学校図書館」(理論編)(2008年)，「特別支援教育と学校図書館」(実践編)「DAISY体験・講習会」「学



図6 ワークショップ「はじめてのアニメーション：読む力を引き出すメソッド」

校図書館を活用した調べ学習における協働のあり方を考える：教員の立場から、司書の立場から」（2009年）、「ようこそ！学校図書館へ：子どもたちをひきつける楽しいオリエンテーション」「SLiiC Twitter 大作戦！：学校図書館員のための Twitter 入門講座」（2010年）、「デジタルブックトーク体験・実践講座：ブックトークの可能性を探る」「読みに困難を抱える子どもたちへの支援のあり方／DAISY 体験会」（2011年）、「UST 学校図書館 ch ～世界へ★発信～」(2012年) などである。これらのうち、2011年に実施した「デジタルブックトーク体験・実践講座：ブックトークの可能性を探る」（図7）は、都内の公立小学校を会場に、あるテーマにそって複数の本をつないで紹介するブックトークを学校で眠っていることの多い電子黒板を活用して行うという講習会であった。また、「読みに困難を抱える子どもたちへの支援のあり方／DAISY 体験会」（図8）では、学習障害（LD）のために読み書きが困難（ディスレクシア）な児童生徒が小学校や中学校にも多数在籍している今日にあって、学校図書館としても読みの困難さを軽減することに有効なメディアを知り、整備していこうという



図7 「デジタルブックトーク体験・実践講座：ブックトークの可能性を探る」



図8 「読みに困難を抱える子どもたちへの支援のあり方／DAISY 体験会」

趣旨のもと、有効なメディアのひとつであるマルチメディア DAISY 図書¹⁴⁾（電子書籍の一種）を体験した。

SLiic が開催する「サマー・ワーク・キャンプ」や各種講習会では、事後の学習（振り返り）も大切にしている。当日学んだことをもとにした実践のなかから生まれた成果や疑問を再び参加者で持ち寄り、意見交換できるように、後日、振り返りの会を開くこともある（参加できない人のため

にウェブサイトでも配信)。こうした振り返りの会を設定することも、既存の研修では見られない。

(4) 短文投稿ブログや動画での配信とアーカイブ化

SLiiCでは、「サマー・ワーク・キャンプ」や各種の講習会に“場所”や“時間”の関係で参加したくてもできない人に対して、2009年から短文投稿ブログ Twitter を用いた実況中継や動画配信・共有サービス Ustream を用いた動画配信を行っている。

Twitter や Ustream を用いることには、記録を残すこと（アーカイブ化）が出来るという利点もある。例えば、「読みに困難を抱える子どもたちへの支援のあり方／DAISY 体験会」では、Twitter の実況中継のテキストデータが、後日、参加者の手によって Togetter という Twitter の内容をまとめるサービスを使って一覧できるように整理された¹⁵⁾ほか、Ustream で配信された動画は編集を加え、現在も視聴できるようにしている¹⁶⁾。このように、講習会と同時に行う実況中継や動画配信だけでなく、アーカイブ化することで、いつでも何度でも閲覧・視聴して学ぶことが可能となる。「読みに困難を抱える子どもたちへの支援のあり方／DAISY 体験会」の動画の視聴回数は2013年7月現在、約200回に達している。

ただし、Twitter や Ustream を活用することには課題もある。なかでも、Ustream の動画配信は機材の確保や技術面においてハードルが高い。この部分については、コンピュータやインターネットの知識やスキルに長けた研究者がメンバーとして参画していることで実現できているというのが実情である。つまり、そのメンバーが、個人所有の機材を用いて中継業務を一手に担っているということである。個人頼みではなく、組織的・継続的に Twitter を用いた実況中継や Ustream を用いた動画配信とそのアーカイブ化を行うことのできる体制づくりが必要といえる。

(5) SLiiCの課題

以上が、SLiiCというプロジェクトの主な活動である。ウェブサイトのユーザを対象とした調査や各種の講習会の参加者を対象としたアンケートの結果からは、概ね好意的な評価を得ることができており、学校図書館職員の専門性やスキルの向上にSLiiCの活動がある程度貢献できたと考えられる。しかし、いくつかの課題も指摘できる。

課題の一つは、SLiiCの組織の持ち方である。現状では法人格を持たない非営利の活動として展開している。しかし、法人格を持たないために助成金の申請資格が得られないケースが生じるなどの活動上の不利益も否めない。とりわけ、無料または資料代程度での講習会の開催を継続していくためには、公的あるいは民間の助成金に頼らざるを得ない。NPO法人化などを検討する段階にきているといえる。また、活動自体も、特定の参画メンバーに依存しなければ成り立たない部分もある。例えば、前述したTwitterを用いた実況中継やUstreamを用いた動画配信とそのアーカイブ化などである。活動の継続や充実を考えたとき、特定の個人に依存しなければならない状況を解消することが急務である。

課題の二つめは、ウェブサイト上で提供されているコンテンツの充実や更新である。コンテンツの充実はもちろんであるが、すでに提供しているコンテンツの内容も、公開してから年数が経つと古くなってしまう。新鮮な情報を提供し続けるためにも、最低でも1～2年に1度は全コンテンツの内容の再検討と更新が必要であろう。

課題の三つめは、他の団体やプロジェクトの活動との差別化と連携である。SLiiCが活動を開始した2005年当時、ウェブサイトでの自己研修に資するような情報提供を行う活動は他にはなかった。しかし、現在では、ウェブサイトを活用した類似の活動が複数展開されている。例えば、東京学芸大学学校図書館運営専門委員会が2009年度から提供している「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」¹⁷⁾がある。このウェブサ

イトでは、校種、学年、教科・領域の別に学校図書館を活用した学習指導案の提供などが行われている¹⁸⁾。これは、SLiicCのウェブサイトを提供している「学校図書館活用の学習指導案」と重複するものである。こうした類似する活動との差別化を図り、いかに特色を打ち出していかかが今後は重要となってくる。もちろん、差別化を図るということは、対立するという意味ではない。各々の活動が特色を出し合いながら、相互に連携し合い、相互に学校図書館職員の自己研修の機会を提供できる環境を高めていけばよいのである。

3. 学校図書館職員の研修機会のあり方

学校図書館職員の専門性やスキルの向上を図るための研修の機会としては、自治体の教育委員会が行う研修と外部の学校図書館関係団体などが主催する研修に自主的に参加する自己研修があり、これら既存の研修機会には、“情報不足”、“孤立”、“場所”、“時間”、“費用”といった課題がある。こうした諸課題の軽減ないし解消を図り、学校図書館職員の研修機会、とりわけ自己研修機会の充実に資するためにはどのような取り組みが必要なのかをSLiicCプロジェクトの活動を事例として概観してきた。

既存の研修機会の諸課題を軽減ないし解消するためにSLiicCが取り組んだ活動は、大きく次の3つであった。すなわち、①ウェブサイトによる情報提供、②サマー・ワーク・キャンプや講習会などの開催、③サマー・ワーク・キャンプや講習会などの短文投稿ブログや動画での配信とアーカイブ化の3つである。これら3つの活動の内容をもとにさらに整理すれば、a. ICTを活用した情報提供、b. 体験的なワークショップや実習などの重視という2つの特徴が見えてくる。

ウェブサイトやSNSなどのICTを活用しての情報提供は、今や、各地

の教育委員会や既存の学校図書館関係団体でも多くが行っているところではある。しかし、教育委員会が公開しているウェブサイトには代表されるように保護者や市民といった一般向けの情報提供がメインであり、そこに学校図書館職員の研修機会の充実に資するような内容を見出すことは難しい。今後は、各地の教育委員会や既存の学校図書館関係団体でも、個人情報保護やセキュリティに留意した上で、研修会での講演・講義内容についてTwitterなどを活用してテキストベースで実況中継したり、音声や動画で配信したりすることがあってもよいだろう。

また、既存の研修会会の多くは、講演・講義形式で講師の話を聞くだけのスタイルである。しかし、ワークショップや実習などの体験的な形での研修にすることで、参加者同士で学び合いや交流が自然と生まれ、そこでの学びは一段と充実したものとなる。体験したことをすぐに現場で活かすこともできる。

ワークショップや実習などの体験的な形式を中心とした対面可能な場での研修機会と、ICTを活用したオンラインでの研修機会を組み合わせたハイブリッドな研修機会をいかに普及、充実させていくか。学校図書館の機能の充実や積極的な活用を求める機運が高まっている今こそ、その運営を中心になって担う学校図書館職員の専門性やスキルのいっそうの向上は不可欠であり、そのためにも新たな研修機会の構築が求められる。

付記

本稿は、2012年8月26日に開催された日本教育学会第71回大会における口頭発表「学校図書館職員のスキルアップを目指した取り組みについて」の内容をもとに執筆したものである。

注

- 1) 文部科学省『平成24年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について』、2013年、p.5.

- 2) 上掲注1), p.2.
- 3) 2013年7月1日現在, 「学校図書館法」を改正し, 学校司書を法制化する検討が「子どもの未来を考える議員連盟」を中心に進められている。
- 4) 前掲注1), p.4.
- 5) 前掲注1), p.4
- 6) 「学校図書館司教諭講習規程」に定める5科目とは, 「学校経営と学校図書館」「学校図書館メディアの構成」「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」「情報メディアの活用」である。
- 7) 学校図書館を考える全国連絡会が調査した「東京都公立小・中学校の図書館職員(学校司書等)配置状況(2012年5月1日現在)」による。
- 8) 例えば, 学校司書の場合, 全体の68.8%が非正規雇用(文部科学省『平成24年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について』, 2013年, p.4)であり, 公費で外部の学校図書館関係団体などが主催する研修への参加が保障されるケースは稀である。
- 9) SLiiCの歴史については, SLiiC五周年記念誌編集委員会編『学校図書館プロジェクト SLiiC History 2006-2011』, 2012年, 83p.に詳しい。
- 10) SLiiCのウェブサイトは <http://www.sliic.org/>
- 11) <http://www.netcommons.org/>
- 12) 野口久美子・大作光子・横山寿美代・野口武悟「学校図書館運営マニュアルの内容分析—教育委員会等を対象とした調査から—」『第12回情報メディア学会研究大会発表資料』, 2013年, p.13-16.
- 13) 2006年と2007年の8月には, 「夏合宿」という名称で実施し, 2008年8月から「サマー・ワーク・キャンプ」の名称で実施している。
- 14) DAISY(デイジー)とは, Digital Accessible Information SYstemの略称であり, デジタル録音図書の国際標準規格である。音声だけでなく, テキストや画像も同期できるようにして電子書籍化したものがマルチメディア DAISY 図書である。学習障害や知的障害などのために紙の活字図書では読みに困難さを感じる人に配慮して作られたアクセシブルなメディアの1つである。
- 15) <http://togetter.com/li/183089> で閲覧可能(2013年7月1日現在)。
- 16) <http://www.ustream.tv/channel/sliic-on-ust> で視聴可能(2013年7月1日現在)。
- 17) <http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/>
- 18) 野口武悟・中山美由紀「東京学芸大学「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」3年の歩みと展望」『学校図書館』738号, 2012年, p.69-71.